



No.73 2005. 1

株よかネット

NETWORK

地域の基幹産業としての仕組みが定着 松江の観光 その三
 -ソフトインフラが支える観光産業のマネジメントシステム- 2
 空から眺め、土塁を歩き水城を感じる
 「水城を空からみる会」(第2回)、
 「水城を歩いて古代食を食べよう会」(第4回)報告 6
 百済の山城を見たいと思った -第3回セミナー報告- 9
 都市と農村の相互連携による、魅力ある田園居住づくり
 田園楽住の会の活動と、現在の到達点 11
 調整区域の田園居住は、農村集落活性化事業
 第4回市街化調整区域、地域づくり研究会報告 14

見・聞・食

来年も是非見に行きたい“築城町大楠コンサート” 16
 水との戦いの中から生まれた先人の知恵と熱意が伝わる
 -白水ダムと円形分水- 17

まち歩き

第一回福岡・博多まちあそびの会
 -古代から近代までの福岡・博多の歴史を見て歩く- 18
 自分が住んでいる町の宝を探す -熊本県小川町- 20

所員近況

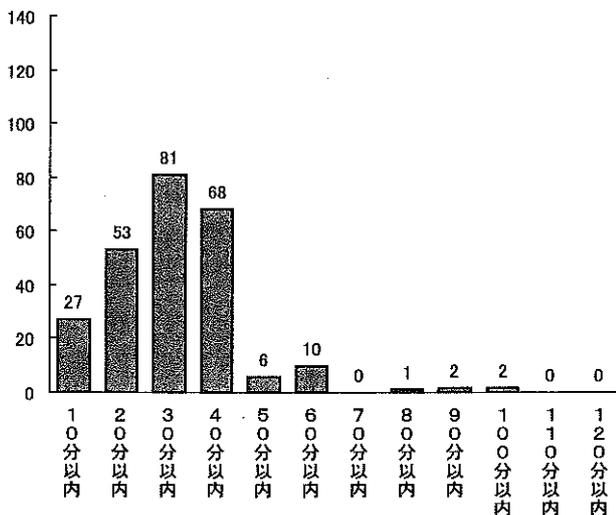
平凡常識教語録① 観光案内標識消滅の法則 21
 30年ぶりの山笠 21
 古代食づくりは根気が必要 22
 重層的ネットワークの連携に向けて 23
 “死後の世界はない”と考える日本人 23
 変わった鍋を食べました 24
 「玄米めし」試しています 24

●田園居住するための許容通勤時間は60分

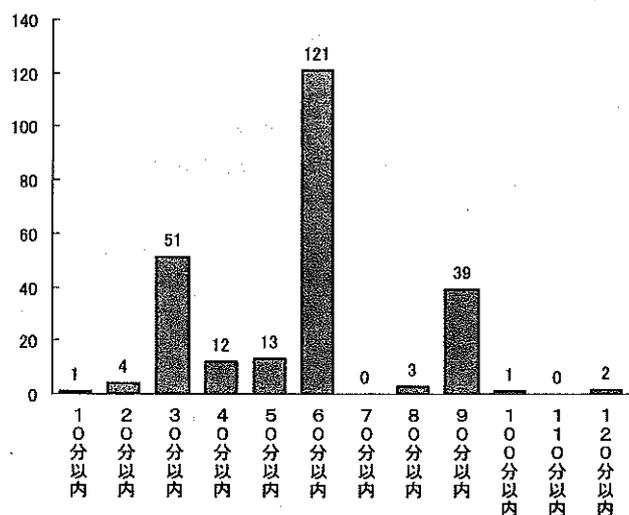
福岡市在住の方に田園居住のニーズについてアンケート調査を行った。315人の回答者のうち半数以上が田園居住に関心を持っており、20代～60代の年齢層で幅広く存在していた。回答者の多くは賃貸の集合住宅に住んでいるが、その半数以上が田園居住に関心を持っており、マンションや戸建て住宅を所有している人でも関心を持つ人が多くなっている。

現在の通勤時間は30分・40分という回答が多かったのに対し、田園居住を行う際に許容できる通勤時間を聞いたところ、60分かかっても良いと考える人がもっとも多く、90分という回答も目立っている。田園居住のためには、都市部からある程度の距離が必要であることを納得している人が多いことがわかる。

【現在の通勤時間】(回答数250票)



【田園居住する際の許容できる通勤時間】(回答数247票)



資料:田園居住アンケート調査、協同組合「地域づくり九州」

地域の基幹産業としての仕組みが定着 松江の観光 その三
 —— ソフトインフラが支える観光産業のマネージメントシステム ——

糸乗 貞喜

そもそも、何ごとによらず“つづく”ということが、「ことの善悪・意義」はもとより、あらゆる基準よりも重要だと思う。不運や不幸も一瞬のうちに通り過ぎるならば、我慢も出来よう。逆に、何十万人、何百万人を集める立派な観光イベントでも、一瞬・一日だけのことなら効果もそれほど見込めない。もちろん例外はある。“一年を十日で暮らすよい男”といわれた相撲取りは、文字通り一年間に十日しか相撲を取らなかった。今でも、十日戎の神社や節分で有名な神社、稲荷大社などは、短時日の間に一年分の稼ぎがあると聞く。とはいえ、相撲も今では15日が六場所、その間は巡業や練習で大変らしい。怪我をしても治療をする暇がないとも言われている。神社もいろいろ副業をしている。

松江の観光の面白さは、“つづく”ということ意識して、そのシステムインフラとしての機能を、市の観光課と財団法人松江市観光開発公社が担っていることである。インフラストラクチャーという言葉は、もともと「下の構造」という意味で、社会経済的には法制度、経済＝商習慣、仕組み、モラルなどととも、ハードな道路、鉄道なども含めている。ここでは前者をソフトインフラと呼ぶことにする。公共団体が取り組む仕事の場合は、大イベントや道路などのハードインフラには熱心だが、観光を日常的に続かせるソフトインフラに熱心なところは少ない。

今回は観光産業を機能させ継続させる、人文的システムについて報告する。観光の要素を概観すると次のようになる。

- a. たたずまい；風土千年、風景百年、景観十年などと言われているが、出雲・松江の風土・風景の重みはすごいし、近年景観に対する保全もよく行われている。
- b. 施設；この厚みもすごい（後述）。
- c. 案内地図、パンフレット；たくさんあった。
- d. 案内標識；迷わなかった。

- e. 移動システム（後述）
- f. ガイド；ボランティアガイドの養成をしている。
- g. ホテル、旅館；それほど泊まっていないのでよくわからない。
- h. 飲食サービス；この案内があまりないように思った。
- i. ショッピング；土産物の厚みは、松江藩の殖産政策、松平不昧公以来の茶道などの文化政策を反映していて、買ってみたいものがたくさんある。

●移動システムと施設の関係

松江城をとりまく堀川に「ぐるっと松江堀川めぐり」の遊覧船が運航されている。一日乗車券が1200円で、三カ所の乗船所が観光の拠点になっており、一日中何度でも乗ることが出来る。

「ぐるっと松江レイクライン」は、一日乗車券が500円で、何度でも乗り降りできる。これが遊覧船の船着き場と繋ぎながら、外周コースとなっている。つまり、遊覧船・バスとあわせて1700円出せば、遊覧船で松江城大手前 小泉八雲記念館

遊覧船とバスのネットワークで観光客の移動をサポート



※番号の付近には、こんな観光施設があります

- | | |
|-------------------------------------|---|
| ① 小泉八雲記念館、小泉八雲旧居、
武家屋敷、明々庵、田部美術館 | ⑥ 島根県立博物館 |
| ② 松江城 | ⑦ 松江名産ホール、松江名産館 |
| ③ 松江郷土館 | ⑧ 県立美術館 |
| ④ 島根ふるさと館 | ⑨ くにびきメッセ |
| ⑤ カラコロ工房 | ⑩ 至ルイス・C・ティファニー庭園美術館、
イングリッシュガーデン、松江フォーゲルパーク |

へ行き、バスに乗り換えて寺や温泉などを周り、また船に乗ってカラコロ工房へ行き、そこからバスで県立美術館など、さらに大手前のふるさと館まで船に乗るといった遊び方が出来る。一日中遊んだあとは宿泊につなげたり、夜の消費も考えた魂胆が丸見えみたいだが、なかなか親切的な魂胆ではある。

舟の内周とバスの外周の関係を図に示した。主な施設も示してある。

●財団法人松江市観光開発公社の概要

マネージとは「うまくやる」と言うことだと辞書に書いてある。松江の観光は、市の観光課と財団法人が「うまくやっている」ように見える。その実行の要になっている(財)松江市観光開発公社の説明をする。

事業概要

温泉配湯事業、温泉スタンド事業

駐車場事業；4カ所

湖北芸術文化村ショッピング事業

レンタサイクル事業；780台

土産品販売業

市有観光施設の受託管理；この仕事の比重が大きい

- ・松江城；267千人、大人550円(入場者、H16年度、以下同じ)
 - ・小泉八雲記念館；178千人、大人300円
 - ・武家屋敷；149千人、大人300円
 - ・出雲かんべの里；2.2千人、大人400円
 - ・自然休養村；31千人(利用者)
 - ・カラコロ工房；320千人(利用者)
 - ・湖北芸術文化村；300千人、大人2000円(入場者)
 - ・松江フォーゲルパーク；300千人、市営部分のみ500円。センターハウスという花の展示温室も含む入場は1500円。こちらはペゴニア1500品種、コリウス170品種などが年中満開。さらに、フクロウの飛行ショウが日に何度か行われている。
- 観光イベントの実施；年に20回ぐらいある。
- (財)公社の職員数 公社勤務の市職員は3人、公社職員が17人、嘱託・臨時職員が34人、合計54人(H16年度)。それらの業務は以下の通り。上記の受託管理業務とは一致しない。

私はこの54人という数字に驚いた。とにかく

これだけの人を雇用している。これ以外にも常勤、非常勤の役員が少しいる。その人達の属する分野を下記に記す。

- ・公社事務局
- ・松江城
- ・小泉八雲記念館
- ・武家屋敷
- ・出雲かんべの里
- ・カラコロ工房
- ・くにびきメッセ
- ・市観光文化課
- ・国際交流協会
- ・観光協会
- ・湖北芸術文化村
- ・松江フォーゲルパーク

●堀川遊覧船の経営状況

まず、遊覧船実現までの背景と経緯を述べると、昭和41～42年頃堀川の水質悪化が起こり、一部埋め立てて道路にする計画があった。それに対して住民の反対があり、「きれいな川を取り戻そう」という意識が高まった。それにつれて草花を植えたり、清掃活動をするなどの活動も起こった。昭和55年に松江青年会議所が「よみがえる堀川の会」を発足させ、市に堀川に遊覧船を運航させるよう提案した。昭和63年に建設省の「ふるさとの川・モデル事業」に指定され、水辺の空間を生かした環境づくりの計画を進めた。

事業化は、平成8年に市の関係部局を集めた「堀川遊覧推進会議」を設置し、堀川の遊覧コースの整備、コースにある16の橋の模様がえや修理などを行った。平成9年3月の就航開始以後も、コース沿いに花を植えたり、浪害防止のための石垣の設置などを行っている。次頁の表1「開業から現在までの乗船者数の推移」で分かるように、開業後3年目には30万人以上の乗船客を得て、経営は軌道に乗ったと見られる。

遊覧船特別会計を見て、金額の多さと黒字ということに驚いた。この公社直営事業は338千人の乗船者を集めて、323百万円の売り上げがある(子供、団体があるので平均単価は975円)。借入金収入などという項目があったりして、分かりにくい決算ではあるが、私の見たところでは2～3千万円の黒字だと思う。乗船したときに、船頭さんからいろいろ話を聞いたが、黒字経営に対す

表1 開業から現在までの乗船者数の推移

単位(人)

	H9年度	H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度
乗船目標	5,000	150,000	250,000	350,000	330,000	335,000	340,000	340,000
実績	75,447	212,963	324,632	307,404	349,659	338,675	338,106	
増減	25,447	62,963	74,632	▲ 42,596	19,659	3,675	▲ 1,894	
就航日数	199日	351日	353日	362日	361日	363日	360日	日
備考	就航日 H9.7.20 (乗船場2ヶ 所)	H10.7.20 大手前乗船 場オープン (乗船場計3ヶ 所)	H11.10.10 50万人達成	鳥取県西部地 震の風評被害 により減	H13.6.10 100万人達成 9月の同時多 発テロの影響 により、秋の 観光客増	10月後半に 寒波が例年よ り1ヶ月早く到 来した影響	春から夏の長 雨の影響によ る集客減	H16.6.5 200万人達成

表2 船頭・職員の数及び年齢分布(H16.3.31)

表3 営業状況

年齢	~44	45 ~	50 ~	55 ~	60 ~	65 ~	70~	計
船頭の数	0	1	4	10	36	44	0	95

	運行日数			運航便数 合計	乗船客数 合計	乗船料(円) 合計
	運航	運休	運航率			
平成11年度	353	13	96.4	33,514	324,632	312,298,450
平成15年度	360	6	98.4	42,999	338,106	329,736,120

資料:財団法人松江市観光公社の経営状況説明書について

る意欲が感じられた。

この事業に属する人たちの数は、役員と市職員が4人、公社の嘱託・臨時職員が21人、船頭さんが95人である(表2)。

遊覧船の初期購入費は分からないが(250万円のような)、40艘の減価償却済み額が1億円ぐらいで、未償却額が1千万円ぐらいになっている。今後は償却済みの船で商売が続けられるわけだ。またこの会社(公社)は変な会社で、客用でなければ中古の船を買ったりと、経営合理化を図っているようだ。ここまでやる気であれば、利益がでるはずだ(表3)。

●観光の日常化に県立美術館が貢献

取材に行ったとき、是非見てくれと市役所の人にいわれたのが、県立美術館と松江ウォーター・ヴィレッジ(ルイス・C・ティファニー庭園美術館と松江イングリッシュ・ガーデン)である。ティファニー美術館は大変面白かったが、紹介するスペースがないので、一言だけ述べることにする。

以前に博多で、ヨーロッパで製作された(あるいは中国などへ発注された)古伊万里のコピーと本物をまとめて展示していた。それを見て感じたことは、本物の古伊万里に比べて輪郭がカッコリしていて、面白味に欠けていた。このティファニー美術館は、日本の美術がヨーロッパに与えた影響を積極的に展示していた。ここにも古伊万里とそのコピーが展示されていた。残念ながらカラー写真でないので、十分伝えることが出来ないが、本物は赤い花びらはアカだけで書かれていたが、

ヨーロッパ製の古伊万里は、花びらに細い線で輪郭が縁取られていた。美意識の所為か職人の感覚や技術の所為か分からないが、日本の文化のゆとりと深さを感じた。このような美意識の低層が、谷崎潤一郎の「陰影礼賛」などつながっているのかも知れない。松江に行かれた方は、是非ルイス・C・ティファニー美術館にも足を延ばしていただきたい。

島根県立美術館は宍道湖の東端にある。案内パンフレットに「夕日の見える美術館」とあるように、宍道湖の広がりや夕日を取り入れるというモチーフで設計されている。湖側は全面ガラスで館内からも楽しめるが、湖側にでるとゆったりした広がりがあり、石像彫刻もあり、くつろいでいる人が沢山いた。

この美術館のウリはこの空間の豊かさで、ゆったりしたロビーには無料で入れる。だからロビーを通り抜けて湖側に出て楽しむのも無料である。私は館の北東端にあるレストランでビールを飲み



ティファニー庭園美術館にあった本物の古伊万里(左)とヨーロッパでつくられたコピー(右)

ながら、陽の沈むのを待っていた。外に出たり入ったりビールを飲んだりしながら写真を撮った。このレストランには地元の人たちが、何組か会話を楽しんでいた。

もう一つウリがある。パンフレットに開館時間が「10月～2月...10:00～18:30、3月～9月...10:00～日没後30分（展示室への入場は閉館30分前まで）」と書いてある。開館時間までが、夕陽を意識している。運良く天候に恵まれ、十分楽しむことが出来た。申し訳ないが入場料は払っていない。

●縁結火(えんむすび)という花火を売る

美術館を進められたとき、「他に面白いことはありませんか」と尋ねたら、「“縁結火”という花火の打ち上げをやっていますよ」といわれ、さらに「今晚ボランティアガイドの講習会がありますから、出てみられてもいいですよ」ということだった。

“縁結火”はうちあげ花火の個人販売である。本物の花火を買って、伝えたいメッセージを読み上げながら宍道湖上に打ち上げる仕組みになっている。例えば「つき合ってもう4年、そろそろプロポーズしようかな」とか、「還暦のお祝いに子供達がプレゼント」、「結婚記念日だから」などといったメッセージがある。花火のセットは2万円から18万円までである。

- ・シルバーセット(S)2万円；9号玉(上空での広がり直径110 cm)3個 12号玉(＃130 cm)2個
 - ・ゴールドセット(G)3.2万円；9号玉3個 12号玉2個 15号玉(160 cm)1個
 - ・スターメイン(S t)18万円；9～15号玉が70発
- 9月11日の縁結火大会ではSが10組、Gが9組、S tが2組あった。合計260発上がったということである。東京から来た人もあったらしい。客からお金を取って景気よくやるなどは見上げたものだ。

●ボランティアガイド講習会

「覗いてみてください。大丈夫ですから」といわれて、のこのこ出かけた。驚いたことに講師がすごかった。小泉八雲の曾孫に当たる小泉凡先生(島根県立島根女子短期大学助教授、小泉八雲記念館顧問)だった。出席者は20～30人で、小泉八雲にまつわる話を聞いた。偶然の幸運で私は楽しかった。

八雲がなぜ松江を愛したかという話では、彼が



幸運にも夕陽のきれいな日に訪れることができた



美術館の壁面ガラスに映った夕陽



ボランティアガイド講習会の会場

japon toneといった、水蒸気が立ちこめたような風景にやすらぎを見いだしていた、という話が面白かった。彼は松江に来る前は、フランス領西インド諸島のマルチニク島にいたので、そう感じたのだらうということだった。

小泉八雲は浸透の民族文化に惹かれて、毎日が新鮮だと言っていたが、食事は洋風で牛乳と目玉焼きとステーキが欠かせなかったらしい。

(いとりのり さだよし)

空から眺め、土塁を歩き水城を感じる

「水城を空からみる会」(第2回)、

「水城を歩いて古代食を食べよう会」(第4回)報告

愛甲 美帆

よかネット71、72号で紹介しているが、「全国都市再生モデル調査」に採択された“太宰府市の水城みずきと山城入門セミナー”(全5回)のうち、実際に水城をみる「水城を空からみる会」「水城を歩いて古代食を食べよう会」を開催した。参加者30名を募集したところ、どららもすぐに定員に達した。

<水城を空からみる会(第2回)>

●大宰府政庁跡をヘリポートに

10月30日(土)、前日までの天候の不安が嘘のような晴天だった。

当初、セスナでの遊覧を考えていた。しかし、水城が福岡空港の進入路上にあり、遊覧飛行のための繰り返しの発着が難しく、ヘリコプターによる遊覧となった。ヘリポートの候補地は大宰府市内の運動場など3箇所挙がったが、水城で守ろうとした大宰府政庁跡に決定した。「せっかく空から水城をみるなら政庁跡で行いたい」という太宰府市担当課の強い思いがあり、いくつかの課題をクリアして実現することができた。

政庁跡は、休日になると緑の原っぱをもとめる家族づれなどでにぎわう。多くの人にこの企画をアピールする絶好の場所であった。

●手に取るように眼下に広がる水城とまちの景色

コースは水城跡 大野城跡(四王寺山) 基肆城(佐賀県基山町) 九州国立博物館 太宰府市内 政庁跡で約10分間の遊覧飛行である。

ヘリコプターの飛び立つ様子はとても迫力がある。周囲の「おー」という喚声と興奮の中で遊覧飛行は始まった。

参加者は男性7割、女性3割、40~70歳代の方々である。体験前のインタビューでは「わくわくする」、「空からの眺めが楽しみ」と待ちきれない様子であった。

どちらが前席に乗るかジャンケンをして決める女性グループもいた。

遊覧中は下界の風景が自分の足もとまで見える。



会場となった大宰府政庁跡



今回乗ったヘリコプター(4人乗り)



ヘリコプターから見た水城とまちの様子

遠く博多湾まで見渡せる上空から水城跡の“自然の地形を活かした博多側に向けた防衛線”の様子が見事にわかった。また、台風後の四王寺山の木々が倒れ土砂が流れている痛々しい様子もみることができた。ヘリコプターに少し慣れた数分後には、地上約300m、時速180~200kmの飛行とは思えないゆったりと快適な遊覧であった。

●水城を立体的にみる事ができた。他の場所もみてみたい

参加された人に感想を聞くと「飛行機からは見られない所までゆっくり、はっきり見ることができる」、「建設中の九州国立博物館(来年10月開館)のブルーチタンの屋根がきれいだった。鳥瞰

図として東側の水城が向こうにも続いている様子がよくわかった」「もう少し乗れるとなおよい」「水城や大城山等、普通面で見れないものが立体的にみれて感激した」「自分の住む街の様子、大きさがよくわかった」「山の緑でなんとか大宰府の“緑豊かな”が保たれている感じだ」など普通は見られない風景に感慨深げであった。

また、他に空からみたい場所として「博多湾」「吉野ヶ里遺跡」「阿蘇地方」などが挙がっていた。

ヘリコプターは揺れもほとんど感じないので、多少高所恐怖症の人でも景色が手に取るように見える体験を楽しめると思う。

<水城を歩いて古代食を食べよう会(第4回)>

●しっとりとした情景の水城を歩く

12月4日(土)、朝から小雨が降り始めた中「水城を歩いて古代食を食べよう会」を実施した。当日は西南学院大学、筑紫女学園大学講師で「大宰府発見」の著者森弘子先生に説明をしていただいた。コースは、水城の西門跡 東門跡 衣掛神社 大宰府市文化ふれあい館(古代食弁当) 九州国立博物館施設見学である。

長さ約1.2kmの水城跡は、当ても今も交通の要所となっていて、現在は鉄道や高速道路により3つに分断されている。当時は、大宰府と外界を遮る土塁で西と東に門があった。

私は今回のコースの中でも特に西門跡の“昔の人の行き来や門の風景”を感じるような、なんともいえない雰囲気を感じて皆さんと一緒に味わいたいと思った。

●古代にタイムスリップした気分になる西門

西門があったという道は車が1台やっと通れる程細い道である。森先生によると、この地区は10年程前は農村風景の中に水城が横たわっている様だったが最近では家が建て込んできたということだ。西門の場所は両側が高さ約8mの水城で木が生い茂り、地層が見える箇所もある。

その西門の道は、まっすぐ伸びて鴻臚館の東の門に続く官道であったことが想定されている。西門を出た博多側の官道は幅12m、大宰府側は9m、門の所は6mという幅だった。鴻臚館に来た外国の人々はここを通り大宰府のある朱雀大路に入ったのではないかとされている。

門自体は3期に分かれて作り変えられている。



中央が今回お話しして頂いた森先生



西門跡付近、大宰府側から博多側へ出てきたところ



東門跡付近、旧国道3号線をひっきりなしに車が行き交う

第1期：水城ができた7世紀後半。冠木門で柱が2本。屋根は瓦葺き。第2期：8世紀前半。足が八つある八脚門。第3期：8世紀後半。楼門形式で水城の堤防より高く、2階建て以上に建て替えられた。8世紀後半の瓦が水城の土塁頂上から出ている。

このような西門の説明があった後、“門をくぐっていると思って”私達は博多側に歩いて出た。博多側には幅60m深さ3mの堀があったといわれている。この堀は西門からJR鹿児島本線の方向

に向かって始まる。発掘当初、堀の表面は平らに復元してあったが、その後調査が進み、発掘30周年の図録からは堰で区切られ、階段状に作られた復元図になっているようだ。

11世紀に詠まれた藤原高遠の歌に「いはかきの水城の関にむれ迎ふ うちの心も知らぬもろ人」という歌があるが「7世紀の段階では岩垣は表に出ていなかったらう」と技師の方が言われたそうだ。

現在水城の博多側では、九州歴史資料館によって、水城本体の地山へのとりつき方を解明する調査が行われている。当日はシートがかけられていて、目にすることはできなかった。また、堤防の上に望楼という見張りの建物があつたなど、古代の技術が西門地区で続々と出てきているようだ。

「土塁を歩きたい」という声があがり、博多側から土塁の上に登り、鉄道で分断されているところまで歩き、大宰府側へ降りた。博多側は急な斜面に対し、大宰府側は緩やかだということを感じた。

●地元の人の水城を思う気持ちが伝わる東門

東門の付近では水城全体の様子を眺めた後、水城大堤の碑のエピソードを聞いた。

大正天皇の御大典記念に、水城を誇りに思う水城村の青年が、自分たちの力で立てたものだ。水城の調査は大正2年の国鉄の鉄道拡幅時の調査が始まりである。当時実測調査はなく、その歴史も一般には知られていなかった。そこで水城の歴史とその実測結果（水城村の竹森善太郎氏が実測、九大工学部教授監修）と、土台には青年団員の名前が刻んである。市民参加の走りともいうべきものである。

水城跡から約200m先に全国的に有名な万葉歌碑と衣掛天満宮がある。歌碑には720年大伴旅人が上京する際、遊女児島との別れの歌「凡ならばかもかもせむを恐みと振りいたき袖を忍びてあるかも」（遊女児島）「ますらをと思へるわれや水くきの水城の上に涙拭ごはむ」（大伴卿）が刻んである。

また地区の氏神でもある衣掛天神は、大宰府に左遷された菅原道真公が長旅の後、旅衣を脱いで石または松に掛けたという話からそれらが祀られている。「ここにそんなに謂われのあるものがあつたのね」と参加者は驚いた様子だった。



古代食弁当:手前は左から赤米ご飯、七種粥、だぶ

●古代食弁当をたっぷり食べて貴族気分

昼食は、古代食弁当である。古代食は、平成3年大宰府展示館（政庁跡）開館10周年記念展で、730年に大宰帥の大伴旅人宅で行われた「梅花の宴」を再現したときに作られた。今回は、森先生、市内の料亭「おたふく」や大宰府食研究会の大賀千恵子さんなどの協力を得て作っていただいた。

古代つくられていたものとして文献や木簡に残っているのは保存食が多いため、水気がなくぼそぼそするものが多い。お弁当の中身は、全てが古代食ということではなく、できるだけ古代食に近い作り方で、食べる時のバランスを考えた内容となっている。

当時にもあつた野菜は、かぶ、大根、いも（里芋）、いもの茎（干したものを「ずいき」、干してないものを「芋がら」）。意外にもにんじんは、室町時代に南蛮貿易で伝えられたので7世紀にはなかったようだ。料理自体に味をつけるという食べ方ではなく、ゆでた野菜などを醬（ひしあ、金山寺味噌のようなもの）、塩、酢につけて食べていた。油は、ごま油が使われていた。

その他は、平城京から発掘された木簡に書かれていた煮塩鮎（荷札には筑後の国生葉郡と記されていた）。この煮塩鮎は今の浮羽郡から筑後川の鮎を干して都まで運んでいたようだ。ほんのり甘くてクリーム色の蘇は「牛乳を十分の一に煮詰めたもの」でチーズのようなものだが、発酵という工程はない。実際は1/7程で固まるようだ。

山芋をスライスして甘葛で炊いたのが芋粥で当時の高級デザートである。この甘葛は、赤いツタから樹液を絞り出したもので甘さを増す冬の一番寒い時期にとる。古代の日本独特の甘味料で遣唐

使も中国に持って行った。芥川龍之介の小説に出てくる芋粥はこれである。(今つくるのは大変なので成分を分析して同じ成分でつくっている。)

このおかずに加え、温かい赤米ご飯、七種粥ななくさかゆ(こめ・あわ・ひえ・きび・赤ごめ・小豆・ごま)、だぶ(煮染めづくりで出た野菜の切れ端を小さく切って、すまし汁にしたた郷土料理)を添えた弁当となった。

参加された方は、蓋を開け臭いをかいだり、写真を撮ったりした後、説明表と見比べ、ひとつひとつ味をかみしめては食べていた。今回は私が古代の味をいろいろ食べてもらいたいと思ったので、品数が多くお腹が一杯になった。しかし、先生は「昔は庶民の食事は一汁一菜だっただろう」と言われていた。

お弁当の感想は「いつか古代米をたべてみたいと思っていたので良かった」「健康食だった。現代に活かしたい」「芥川龍之介の芋粥を大分前に本で読み、美味しそうだったので記憶に残っていた。作り方を教えてもらいたい」。また、「実のところあまりうまくない」という方や「古代酒も欲しかった」「今度は正式な宴の料理を食べてみたい」という方もいた。

●「土壘の上を自由に歩けるようになったのはいつ頃からだろう」。現地を歩いて、時代の流れに思いをはせた1日。

参加された人達の感想をいくつか紹介する。

- ・ ゆったりと、落ち着いた気分になり、ちょっと古代にタイムスリップしたような気持ち。
- ・ 電車から水城をみること30年。初めて西門周辺を歩いて充実した気持ちになった。
- ・ 毎日通っているが礎石の穴など全く知らないものがあつた。
- ・ いかに壮大な国家的事業だったかを実感した。民族の侵入という恐怖にかられたとはいえ、当時工事に携わった人の苦勞がわかつた。
- ・ 近郊に居ながら知らなかつた。今回の参加で良い勉強になった。
- ・ 京の都から太宰府への旅を考えさせられた。

今回はあいにくの雨だったが、今は全く様子の異なる西門と東門や、普段は無い古代食などを森先生の解説で見たり食べたりしたので、当時の水城や人びとの様子を想像しながら、知らない人と会話をしながらの楽しい会となった。

“歩く”と普段は見えないものが見えてくる。地域資源の再発見のきっかけとなった1日だった。太宰府市を訪れる人に自慢したいコトの1つになって欲しいと思っている。(あいこう みほ)

百済の山城を見たいと思った

—第3回セミナー報告—

雪丸 久徳

11月20日(土)、第3回セミナーを「水城の歴史的背景と国際関係～大宰府(日本)と扶餘(朝鮮半島)～」というテーマで、地域活性化複合施設「太宰府館」で行った。当日は新聞による案内や「太宰府館」の広報、口コミ等によって、太宰府市や周辺の市町村から61名(男性47、女性14)の参加があつた。

今回のセミナーは第1回に引き続き小田富士雄先生に講演をして頂いた。第1回セミナーのときは、水城は単体の土壘と考えるのではなく、北の守りとしての水城・大野城と、南の守りとしての基肄城きいがセットとなって西の都「大宰府」を守っていたという話やそれにまつわる論争についての話をしていただいた。

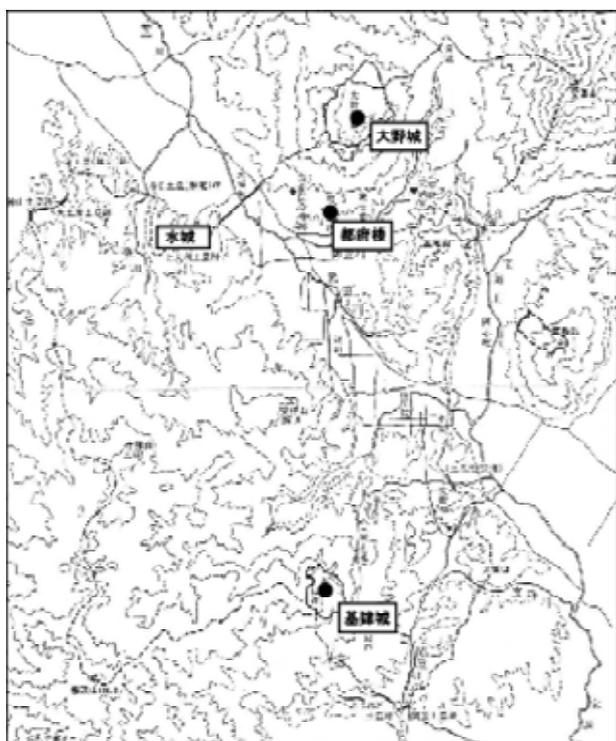
今回は、なぜ水城や山城が作られたのか、どこから水城というアイデアが出てきたのか、当時の日本や朝鮮半島内の国際状況などについて話しを聞くことができた。

その内容について以下に記す。

- ・ 古い記述(日本書紀、續日本紀)を見ると、水城や大野城、基肄城がつくられた664年から西日本の各地の山城がつくられ始め、690年までにはそのほとんどが完成している。その後10年間はできあがつたものの修理を行っている。しかし、700年に入ると山城は廃止されている。山城には、築城、修理、廃止の大きく3つの流れがある。
- ・ 大野城は水城を突破されたときに備えてつくられた籠城タイプの城である。当時70近くの倉庫があり、発掘により礎石がでてきている。大野城は、百済の都城制をモデルにしてつくられている。
- ・ 大野城は四王寺という呼び名があるが、これは、新羅が日本を仏力で呪詛しているという噂がた



扶餘の羅城
出典:「百濟熊津・泗沘期の都城制と倭」(小田富士雄)



ったため、その呪いに対抗しようと774年、日本政府は大野城に四王院という四つの寺をつくり、四天王（増長天、広目天、毘沙門天、多聞天）をおいた。このことがきっかけで四王寺という名がついた。

- ・ 3、4世紀より百濟と新羅は対立関係にあった。日本と新羅は5世紀以来仲が悪く、そんな状況で日本は百濟を応援していた。
- ・ 朝鮮半島の北には、騎馬民族高句麗が勢力をもっていた。新羅は中国文化に憧れていたが、高句麗勢力が強かったために、陸路による中国と

の交流ができずにいた。新羅は、中国との交流の道を開くために、朝鮮半島の西の海へ出ようと試み、百濟を侵攻した。472年、新羅の勢力に押され百濟は、広州へ遷都した。その後も新羅の勢力に押され、538年、百濟最後の都、扶餘に遷都した。

- ・ 660年、新羅は唐と組んで百濟を攻め落とし、朝鮮半島を統一した。このことを知った日本の天智天皇が百濟の復興のために出兵したが、白村江の戦いで敗れた。敗れた日本は、664年に戦勝側の侵攻に備えて水城をつくった。
- ・ 高句麗、百濟滅亡後、唐は朝鮮半島の支配をもち、領土を統治するための東安都護府をおいた。しかし、新羅の巧みな外交術により唐は撤退を余儀なくされた。これより朝鮮半島の新羅統一時代に入っていった。白村江の戦い直後、朝鮮半島の支配をめぐる新羅と唐が争っていたため、唐・新羅が日本に攻めてこなかったのではないかと考えられる。
- ・ 日本は百濟を支援してきたが、日本が百濟を援護する目的は2つある。一つは鉄資源の獲得、もう一つは大陸思想や技術を持った人の獲得である。当時の日本は大陸文化への憧れが強かった。
- ・ 博多側に堀をつくり、いざというときには水を流し込む「水城」という発想は扶餘をモデルにしている。扶餘では都を囲んで土塁石塁をめぐるし、外側を堀の役目として、白馬江が流れている。また土塁の内側に4つの池があり、いざというときに備えて水を溜めておき、敵が攻めてきたときに流す仕組みになっている。
- ・ 対馬にある金田城は角がある珍しい山城で、百濟の山城とは形式が異なっている。金田城は新羅や伽耶に見られるタイプであり、朝鮮式山城以前にできた城だと思われる。
- ・ 日本の都城制には、藤原京、平城京、平安京のように隋・唐をモデルにして、碁盤の目式の町割り、条坊制を取り入れたものと、大宰府のように中国の建康（今の南京）や扶餘の都をモデルにして、都のまわりを土塁で囲むものと2つの都城スタイルがある。

以上、先生の話の中からいくつか取り上げてみた。他にも大野城の3期にわたる変遷の話や鞠智城^{きくち}についての話もあったが、なかでも私が今回一

番興味を持ったのは、水城のルーツの話だった。スライドを見せて頂いたが、扶餘の山城を実際に目で確かめたいという気持ちがますます強くなった。来春あたりに企画しようと考えている。

●地元の歴史への関心が高くなっている

セミナーでは、参加者にアンケートをお願いしている。今回は最近興味を持っている地域資源（歴史、自然）について聞いてみたところ、以下のような回答が得られた。

- ・大野城跡・基肄城跡の現地見学、歴史背景
- ・怡土城のつくられた背景
- ・小倉土塁の位置について
- ・宮地嶽の山城見学
- ・四王寺山の歴史的背景
- ・神籠石について
- ・修験道の歴史としての宝満山、山岳宗教

・政庁跡、観世音寺、天満宮

他にも様々な回答があったが、そのほとんどが、太宰府市や周辺市町の歴史や自然についてであり、参加者の自分が住んでいる地元への興味が高いことがわかった。

また自由意見の中では、参加者の自主的な活動への意見が挙げられており、いくつか紹介したい。

- ・大宰府古代の勉強会に参加したい。無ければつくりたい。
- ・このセミナーを継続していきたい。
- ・自分が住んでいる地域の歴史を理解するためにも、実際に現地を見ながらの説明をうけたい。
- ・セミナーの参加者で交流会をやりたい。

今後このセミナーが住民の楽しみの一つとして地域に根付き、住民主体の活動に繋がるようにしたいと思った。（ゆきまる ひさのり）

都市と農村の相互連携による
魅力ある田園居住づくり
田園楽住の会の活動と、現在の到達点

糸乗 貞喜

●計画の考え方と手順のまえがき

二つのことを考えている。一つは農村集落が活力を持って“つづく”ことであり、もう一つは都市に住む人たちが、緑豊かなゆとりある暮らしが出来る方法がないかということである。前者は後記の「 - 集落システム維持のため」であり、後者は「 - 都市住民が緑豊かな環境で暮らすため」に当たる。

この実現に当たっては、土地条件の違いにそれぞれ対応しなければならない。

- a. 市街化調整区域の農地など：宅地となるためには、農地転用(農地 宅地の申請)し、と同時に開発許可手続きをする
- b. 調整区域の非農地：開発許可手続きをする
- c. 市街化区域の宅地：土地に関する手続きは要らない。建築確認申請をすればすぐにOK

私たちが考えているのはaとbである。特に、aタイプの に述べるような相互連携に興味をもっている。cのような立地条件の場合は、仮に1区画が500㎡としても、全体面積が5畝となると、

道路や公園などを差し引いても、数十戸になる。農村集落との一体化は不可能だろう。このついでにcについてふれると、これは都市でコーポラティブハウスといって、共同マンション建設が行われているが、この形が横になっただけである。地価が高いところでは、ゆとりを作るために共同化も必要かも知れないが、郊外部の市街化区域では意味が薄い。市街化調整区域ほどの共同開発の必然性はないように思う。

今後の問題としては、 と に述べていることであるが、行政の意欲との協同である。先日神奈川県庁の方々に田園楽住の話をしたとき、「結局行政としては、何をすりゃあいいんですか」といわれて、 と について話し合った。市町村行政が「マイナスではない。儲かるかもしれん」と思われるならば、実現性を確かめながら「コーディネーター派遣」を行っていただきたい。

【田園居住づくりの手順】

I、調整区域で田園住宅をつくる意味(何のため・誰のため)

集落システム維持のため

- ・供給規模は、集落の受け入れ能力による
- ・環境保全型の地区計画で
- ・地区計画と地区整備計画の組み合わせ方を工夫
- ・ユーザーと集落の地主農家とのコーディネートが必要
- ・リスク回避をどうするか

- ・関係者は、集落、地主農家、行政、居住希望者、コーディネーター
集落住民のため
- ・調整区域の農家は、都市計画＝線引きによって、白地地域や市街化区域の農家に比較すれば、極端な差別を受けたという不満がある……土地を売りたいがっている
- ・今後の地区計画を進めるに当たって、この人達との合意形成をどうするか
都市住民が緑豊かな環境で暮らすため
- ・自分でつくった健康野菜を食べる＝自己保証型固定給の確保
- ・農村の人とつき合い、農産物を分けてもらった
り、地域の文化を楽しむ
- ・アレルギーなどに対応した安全健康な暮らし
農村地域への企業誘致のため
- ・食品工業などは、近郊地域に立地する
- ・労働力立地型の企業を誘致
- ・環境指向のリサーチパークなど
区画整理などによる大規模開発＝今まで大量に供給されたもの(法34-8-10口)

II、農村に住む四つのタイプ

A 通勤型田園居住タイプ

広い土地で、家庭菜園や果樹園などで楽しみながら、都心への通勤で生活を支えるもの。

B 営業型近郊農村居住タイプ

田舎暮らしといっても、悠々自適といった暮らしではなく、都心への通勤も可能な程度の立地条件を生かし、都市側の人を相手にした商売を近郊エリアで営むもの。焼き物・飲食業・パン製造販売などが多い。

C 田舎暮らしタイプ

テレビや雑誌で持てはやされるぐらい稀少な存在。山村などで山林、耕作放棄地などを買ったり、古い農家を買って悠々自適の暮らしをし、通勤は考えない。

D 団地暮らしタイプ

安い住宅供給を追求するため、地価の安い農地を開発して、画一的な小規模宅地を造成したもの。これは農村の中に、都市の飛び地を作ったものである。

III、将来の安全な住宅立地の視点

10年、20年後の予測

- ・町内会・集落とのつきあいは、わずらわしい

- ・顔の分かるつきあいがあった方が安心
- ・マンションにしても団地にしても、防護柵をしてガードマンに依存する
10年後も価値が高い住宅とは
- ・住宅余り時代でも財産価値を維持する住宅とは
- ・分譲マンションは
- ・狭い宅地の住宅は
- ・果樹や雑木のある宅地では、それが育った分は価値が上がるはず

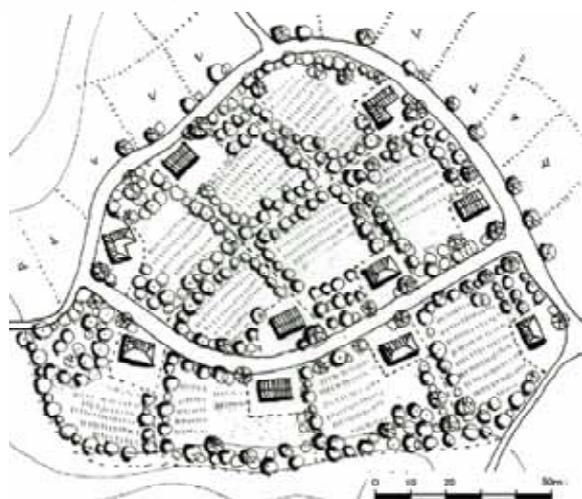
IV、田園楽住生活を実現するために……都市と農村のそれぞれのよさを引き出し、相互に活用しあうこと

- 農村居住に対する農村集落側の期待
- ・農村の暮らしやしきなりに理解のある人で、
- ・集落に活力をもたらすような若い人も含めて、
- ・信頼できる人が紹介してくれるような人たちが、数家族で来てくれたらつき合いやすい
- ・農村集落の行事などに関わりながら、住みついて欲しい
- ・できれば、老齢年金の足しになるぐらいの地代が入ってくるといい
農村居住に対する都市住民の期待
- ・都市の賃貸マンションの家賃程度のローンで（若い人が参加できるように）
- ・都心に1時間程度の時間で通勤でき（都市圏の規模によって差がある）
- ・日常生活のための菜園と花壇、一年中実の生る果樹20～30本、夏の陽を遮る雑木林
- ・緑豊かな環境で、300坪(1000㎡)の土地で暮らしたい
- ・一家族だけで農村に入るのは難しそう。できれば数家族が近所なら

V、計画の考え方

宅地の品質・環境を守り、地価の低下を防ぐ
調整区域の地区計画で対応（市町村）

- ・地区計画の「整備保全の方針」で、集落の将来像や宅地をつくる意義などの位置づけをし、防災についての考え方を決める
- ・地区整備計画区域は、集落のキャパシティに対応して、1～2ha程度で決める
- ・「整備計画」で、道路や宅地の位置を決める
- ・登記手続きなどを最少にするために、原則として筆界などの変更をしない
- ・防災上の安全と、工事費を少なくするために、



極力造成工事はしない

- ・道路も筆界に沿って計画する
- ・道路は用地買収をして工事をし、完成後は公道として引き取ってもらう
- ・賃借、売買などの対象となる面積は、筆界の事情によって面積に違いができるが(例えば250坪の人、360坪の人など)、気にしない
- 農地の下限面積の緩和特区の申請(市町村)
- ・調整区域の地区計画と同時に、申請を出す
- ・計画に当たっては、緑が保全され、小區画宅地にならないようにする
- 都市のコーポラティブ住宅(グループ共同住宅)との違い
- ・コープ住宅は土地の手当てが出来ると、すぐに建物が建てられる
- ・したがって、土地の見込みがたつと、居住予定

者も安心して計画に加わり、資金対応にも参加する

- ・調整区域の計画は、行政による「地区計画」と「緩和特区の申請」がある。この手続きの保証(行政の)がないと、居住希望者は安心して応募できない
- ・この状態で安心感を高めるのが、次に述べるコーディネーター派遣制度である

VI、市町村経営の立場から見た田園居住計画

高品質の宅地造りは、地域の地価の低下を防ぎ、上昇をもたらす

集落の活力が維持出来ることは、行政にとってよいこと

市町村財政のポイントは、住民税・固定資産税など

- ・一戸当たり住民税を10万円払う世帯が10戸入ると、100万円の税収になる
- ・同様に固定資産税を10万円払うと100万円になる。合計200万円/年

計画推進のためのコーディネーター派遣制度

- ・この事業には、行政の立場、集落の立場、農家地主の立場、居住希望者の考えなどが錯綜する
- ・したがって、まちづくりの視点、集落の将来像、都市計画の考え方、農家地主の思いなどをよく聞き、偏らない調整能力のあるコーディネーターの役割が重要である
- ・仮にコーディネーター派遣費用として、行政が一件当たり100万円投入しても、一年の税収の半分程度で回収できる(成功率1/2とすれば1年分)
- ・この制度は都市再開発や中心市街地活性化事業などで行われている

以上が田園楽住の手順であり、行政と集落、農家、居住希望者が協力すれば、行政は税収が増え、その他の人たちもメリットがある形で実現可能だと思う。箇条書きにしたので少し分かりにくいかも知れない。いつでも説明に行きたいと思っているので、声をかけていただきたい。

本当のところをいうと、あと二つの気がある。都市にある大型のマンションなどが、ガードマンを雇って別の領域を造ることによって、都市の町内会が無視され、壊れかかっていることが一つ。もう一つは、郊外の農村地域に単独進出した居住機能純化団地である。九州で見ていると、

「50万人口」と「県庁」という二つの要素がないところは、中心市街地が崩壊して、総郊外化しているように見える。そこでは、道路が便利になり、子供の遊び場や小児科医院まである大規模ショッピングセンターができ、快適な暮らしがあるように見えてはいる。

20年ほど前までは、家の玄関を出ると隣近所の人があり、町内会や集落の人たちの目があった。わずらわしい面もあるが、安心感もあった。私は京都に長いこと住んでいたのだが、あれほど密集してゴチャゴチャしているのに、都心の火事は少なかった。逆に周辺の住宅地の方が多いと思ったので、聞いてみたことがある。返事は「人が一日中沢山いるところは火事は少ないんですよ」という返事だった。

調整区域の田園居住は、
農村集落活性化事業
第4回市街化調整区域、地域づくり研究会報告
本田 正明・原 啓介

●20～30代の参加者が増えている

第4回研究会（11月18日）では、佐賀市や鳥栖市などから「都市計画の担当になったばかりで、専門用語などはわからないが、現在どのようなことが問題になっているかを勉強したい」と、新たに参加される方もおり、私どもの所員も含めて、20～30代の参加者が多くなっていた。

今回は前原市都市計画課の渡辺氏に、市街化調整区域（以下調整区域）の活性化策として進められている田園居住の計画について話題提供していただいた。

以下ではその概要を紹介する。

<前原市の調整区域の状況>

前原市の調整区域では、人口は減っていないが、中山間地では高齢化、少子化が進んでいる。生徒数が減少しており、長糸地区では現在1学年30～40人であるが、5年後には一桁になるだろう。都市計画課でもこのことは問題視しており、地区計画を使った活性化策を考えているところである。

昭和58年以降で、調整区域には2,000～3,000人転入しているが、一旦出て行った人が30～40代に

現在、都市のマンションや郊外団地の住まいは、一歩出ると全く無関係の空間である。大人の多くはクルマというガードを纏って出かける。一方子供は、玄関を出たとたんに無防備な状態に曝され、一人で社会全体と対応しなければならない。現在、「クルマ対コドモ」の事件が多いように見える。その原因は、隣近所・町内会・集落といった、暮らしに対応した防護柵としての“階層的システム”が、失われたことによるのではないか。ここでいうコドモには幼児・小学生・中学生・高校生が含まれる。

この問題の解決のためには、すでに出来てしまっている郊外の住宅団地対策と、今後できる郊外住宅の考え方の方向転換が必要である。

（いとりのり さだよし）

なって戻ってきているようである。それ以外は自然や農地、ゆとりを求めて外から移住してきているようである。瀬戸地区でミニ開発が行われているが、多くが売れ残っている。ミニ開発では売れない。

調整区域の活性化策を考えるにあたっては、市街化区域と同じコンセプトでは無理であり、地域にあった開発を行っていく必要がある。中でも、コミュニティの基礎となる小学生を持つ世帯が少しでも多く来てくれることが大事である。別荘地は自然は豊かだが、それだけでは子を持つ世帯は来てくれない。

開発のパターンは、既存集落の中に住宅を確保するもの、既存集落の横に住宅団地を貼り付けたもの、独立して新たな住宅団地をつくるものという3つが挙げられる。この3パターンについて地元有意向を聞いてみたが、「は住民が新たに地域の中に入るには難しい問題が色々ある、

は既存集落と新集落とのコミュニケーションがなかなかうまくいかない、のような既存集落と近接した「新しい隣組」のようなものが受け入れやすい」という意見が出たため、そうした地域の要望を踏まえた新たな開発としていこうと考えている。戸数は、校区の中に隣組というがあるので、それを超えない10～30戸程度が妥当だと考えられる。また農家から「一般の人には家庭菜園の管理ができないのではないか」という意見も出た。住宅地をそれぞれ300～500㎡にして、500㎡

ほどの家庭菜園を団地の横に併設し、収穫は自分で行き、管理は農家の方にお任せするというスタイルがあってもいいのではないかと。敷地内に農地を持つタイプと、敷地に市民農園が併設するタイプの2タイプを考えている。

今までの開発では、周辺環境との調和が考慮されていなかったり、新住民が地域の活動に参加しない等の問題があった。そこで開発の場所や開発手法の選定などについて地域の方にも参加してもらおうとガイドラインを作成した。地域の人に話し合っただけで田園居住の場所等を設定してもらいたいということで、地域に入って説明している。今年度としては、地域として数カ所開発候補地を選定して、どういう開発ができるか、開発の主体を検討していこうと考えている。

戸数も少ないので単なる民間開発の誘導では難しいと思われるが、すべて公的な開発を行うのも難しい状況である。本当にいいものをつくろうと思うと、市が補助制度などを活用する必要がある。民間の開発の場合、土地の区画を決めたり、登記などにもかなりのお金がかかるので、どのように関われば、安価に理想的な開発ができるかを検討をしている。地元と話を詰めていき、平成18、19年頃から具体的な事業に着手できたらと思っている。

< 意見交換 >

- ・佐賀市は真ん中に商業地、その周りを住宅地、その外側が市街化調整区域となっている。しかし、佐賀市に隣接する町が都市計画区域外であったり、非線引きであるため、そちらに人口が流出している。加えて中心市街地も衰退しており、課題は多い。線引きを外すか、規制を大幅に緩和すれば、ある程度は活性化できるだろうが、コンパクトなまちづくりとは矛盾してしまう。これまでそうした問題解決の手法ばかり気にしていたが、前原市の話聞いて、その手前の“どういうまちづくりをしていくか”という理念の部分をもっと考えることの大切さを感じた。
- ・市民農園を利用しているが、そこには2人の教え名人がいる。プロの農家が指導してくれる環境はいいと思う。また、分筆関係の作業を市が担当することもいいことだと思う。
- ・熊本市周辺の町は、かなりの部分が調整区域で



前原市の田園居住イメージ

(「前原市 市街化調整区域の整備・保全構想」より)

ある。志摩町や久山町は、大部分は市街化調整区域であっても、町の中心部は市街化区域になっている。熊本都市圏の場合、周辺町の熊本市に隣接する部分のみ市街化区域で、町の中心部は調整区域と、熊本市のみを考えた都市計画になっている。これらの町も調整区域の勉強会を立ち上げており、福岡にも視察に来ているようだ。いずれ両勉強会の連携が取ればよいと思っている。

- ・調整区域の開発には2つのパターンがあると思っている。集落は地域の安全・安心の要であり、町内会、集落が維持され、相互にサポートしていくことが良いことであるという考えに基づく開発と、町内会はいらない、個々人が行政と関わっていけばいいという開発の2つである。

前原市では内部、隣接、独立の3パターンの開発を挙げていたが、旧集落とは分離独立した開発は、うまくいかないのではないかと。「集落が健全に維持されることはいいことだ」、という前提・理念が必要であり、集落の活動にきちんと参加する人を受け入れることが必要。入居希望者と旧住民がお見合いして、お互いに行き来しながら、旧住民と新住民がうまくつきうことができるようにコーディネートできる人材の育成が必要ではないか。

- ・地元の人“土地を売りたい”という意向があると思うが、集落環境を壊さず、かつ土地を売りたい人の希望を満たすような開発を行っていくのはなかなか難しい。
- ・調整区域南部の3地域のうち、最も深刻な状況の長系地区で、開発の場所を決めるために住民協議会を立ち上げたが、人口を増やすことが集落の活性化に役立つのか、という意見が出てきた。前原市としては、ガイドラインに沿って場

所を決めてもらって、淡々と仕事をしようとしていたが、そうはいかず、開発を受け入れるのかどうか、まずは地域の人間だけで話をすることになった。これはいいことであると思っている。地域として受け入れてくれるということを決めてくれれば、後は入居希望者に働きかければよい。市としても地区計画をかけたい思いがあり、市の長期計画の中でも認められているのでやれると思っている。

- ・田舎暮らしをしたいという人の集まり、コーポラティブハウスの組合のようなグループをつくっていくことが必要だと思う。福岡市の住民には田園居住のニーズを持った人は3%程度はいると思う。前原市が法制面などで協力があるのであれば、メンバーを募ることもできる。

●調整区域の田園居住は、農村集落活性化事業
調整区域は市街化区域のように、ある条件を満たせば住宅を建てられるわけではないので、一般

の人が家を建てようと思うと、市町村のまちづくりの方針や、地区計画などが必要になる。調整区域で住宅をつくるには、どうしても役場の協力が欠かせない(本号の11頁に詳しく記載)。私たちが田園楽住の会を進めるに当たって、突き当たった壁も「どのようにして田園居住できる土地を確保するか」であった。前原市はその役割をかなり明確に打ち出そうとしており、かなり実現化に近づいていると感じた。

ただ、法制面の問題をクリアしても、これからどの土地を対象にするかという調整や、居住希望者を集めたり、地権者と居住希望者のコーディネートなど利害の絡む仕事が多く残っている。それらは並行的に進めないといけい仕事であり、市街地の再開発事業にも似ている。しかしこれが実現すれば、間違いなく農村集落の活性化モデル事業になると思う。

(ほんだ まさあき、はら けいすけ)

来年も是非見に行きたい
“築城町大楠コンサート”

原 啓介

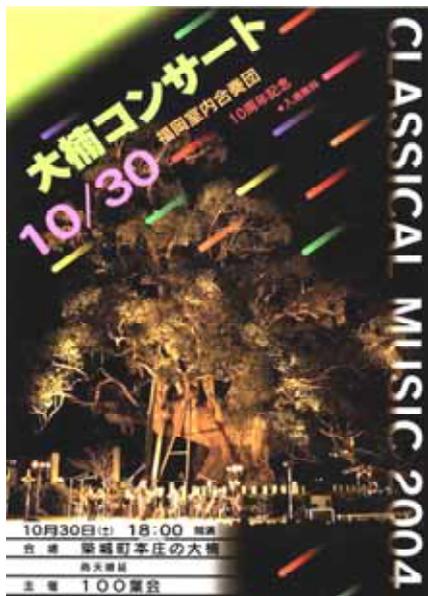
築城町の大楠コンサートとは、年に一回、大楠神社にある「本庄の大楠」の下で開かれるコンサートで、入場料は無料、演奏は福岡室内合奏団、主催はボランティア団体の100葉会である。

会場に入ると、樹齢約1900年、高さ26m、幹周

り21m(日本第3位)の大楠が何本もの支柱で支えられながらも踏ん張って立っており、圧倒的な存在感であった。大楠だけでも素晴らしいが、そこにクラシックの重厚な響きが加わり、何とも言えない雰囲気思わず鳥肌が立った。会場は満員で立ち見ができるほどであり、ざっと見て2000人以上は来ていたのではないかな。

コンサート会場は音響機器やステージ、スポットライト、観客席などが整備されており、会場ではワインやホットコーヒーが振る舞われていたが、その運営費用は全て100葉会メンバーの会費によるものだそう。しかし、大楠コンサートも今年で10年目を迎え、案内チラシには「体力、気力とも10年前と比べようがなく、今のスタッフままでコンサートを存続していくことについても真剣に考えないといけい」と書かれていた。またコンサートの中でも、百葉会の会長さんが「10回目を迎え一区切りがついた」とおっしゃっていた。しかし観客としては、こんなに素晴らしいコンサートは有料にしてもらっても構わないので、いつまでも続けてほしいと思う。

ただ、大楠神社は最寄り駅であるJR日豊本線築城駅から約15kmと距離があり、福岡・北九州市民など町外に住み、車を持たない人は会場を訪れるのが難しいのではないかな。また、会場ではワイン



大楠コンサートの案内チラシ

が振る舞われ、また演奏後にはバーベキュー大会が開かれることも、大楠コンサートにおける大きな楽しみの一つとなっているそうだが、車で来た観客はお酒を飲むことができないため、残念な思いをしているのではない。

そこで、コンサートの日だけでも駅から大楠神社付近の小学校グラウンドまでのバスを走らせることはできないだろうか。そうすれば、「夜空のもと、大楠の下で、クラシックを聴きながら、ワインを飲んで...」というとてもリッチな体験ができるのと思いつきながら、2時間以上かけて車で福岡に戻った。(はら けいすけ)

水との戦いの中から生まれた
先人の知恵と熱意が伝わる
—白水ダムと円形分水—

山田 龍雄

白水ダムについては、たしか2～3年前にJR九州の機関誌に掲載されていた記事を読んで覚えていたので、機会あれば是非訪れたいと思っていた。

白水ダムは竹田市街地から8kmほど南西側、荻町との境にあり、案内板もわかりにくく、あちこち迷いながら、やっと入り口 駐車場に到着した。

さらにここから、山道を歩いて600m下ったところにある。白水ダムに近づくにつれ、ダムを流れる水音が大きくなっていく。やっと白水ダムを正面から眺めると、その迫力と美しさに感動。当日は水量が多かったためか、水も満々と流れ落ち、なんとも快いリズムで心に響いてくる。写真で見るときには、もっとこじんまりしたものではないかと勝手に想像していたのであるが、高さ約14m、横幅約87mと結構な大きさである。

白水ダムは、この地域一帯の農業用水を配水するために大正3年に「富士緒井路」という水路を整備した。しかし、この水路への水自体が不足していたらしく、これを解消するため、このダムを昭和9年から約4年の歳月をかけ、昭和13年3月に完成している。

設計者は、当時大分県農業土木技師であった小野安夫という方である。昭和9年当時、交通条件も良くなかったであろう、この山中でこれだけの



満々と水が流れる白水ダム
平成11年5月に国指定重要文化財となる



左側の側面は緩やかな円弧を描いて水が流れ落ちる
右側の側面で階段を落ちながら水の流れを弱めている



水争いを丸くおさめた円形分水



円形分水の案内板

大工事をしたこと、また、地域の人々も寄附したことなどを考えると、このダムに関わった人々の熱い思いが伝わってくる。特に設計者である小野安夫さんのことについては大分県庁に行く機会があれば、是非調べてみたいと思っている。ちなみに、

ここを訪れたことにより、私の「あなたの九州度自己採点（よかネット70号掲載）」の「行ったことがある」項目で1点増えることとなった。

「白水ダム」から、約5分ぐらい南側に行ったところに「円形分水」というものがある。

この完成までの大まかな説明は、案内板写真のとおりであるが、一旦円形の溜め桧に集めて、地権者が納得のいく水の配分をしている。まさに円形にすることで“まるく”おさまった格好となっ

ており、先人の知恵に感服。円形の側面には水が出る穴が全部で20個あるが、水の配分は耕地面積に比例して8個、7個、5個に割り当てているようだ。

竹田市は、阿蘇外輪山、久住連山、祖母山麓に囲まれた地であって、とにかく湧き水が地域の観光資源となっている。他にも面白そうな湧き水スポットもあり、いつか一日かけて湧き水巡りをしようと思っている。（やまだ たつお）

まち歩き

第一回福岡・博多まちあそびの会

—古代から近代までの

福岡・博多の歴史を見て歩く—

原 啓介

11月6日に「福岡・博多まちあそびの会」を行った。福岡で人気のある場所と言えば、天神のデパート、キャナルシティ、マリノアシティなど、大型の商業施設が多いが、福岡・博多は長い歴史をもち、まちなかにはおもしろい場所、時間をつぶせる場所はもっとたくさんあると思う。私は福岡に住んでいながら地元のことをよく知らないことを実感しているが、この会で遊びながら福岡・博多自慢のストックを増やすことができるのではないかと考えている。

第一回は、福岡・博多の歴史を見て歩くコースを設定したが、開催の1週間前になっても参加者が10名に満たず、事務局としては少し不安だった。しかし当日は晴天にも恵まれ最終的には17名の参加があり、少しほっとしながら「まちあそびの会」がスタートした。

●集合場所から歩き始めて20m、さっそく新たな発見があった

地下鉄赤坂駅に集合し、福岡市観光案内ボランティアガイドの川本一守さんに案内してもらいながら歩き始めたが、集合場所のすぐそばに福岡城赤坂門石垣の跡があった。北側の堀は一部埋め立てられていたが、地下鉄工事により調査され保存公開されているそう（私は毎朝自転車での道を通っているのに全く気がつかなかった...）。これからどれくらいの新しい発見があるんだろうと



古代のトイレトペーパーの藁木
現代人にはちょっと痛そう

わくわくしながら鴻臚館跡展示館へ向かった。鴻臚館は古代の迎賓館ということで、大陸の陶磁器など様々な出土品やその発掘跡などが展示されているが、他にトイレ跡と、そこで発掘された様々な“遺留品”の展示もあった。当時はトイレを備えた施設はごく僅かだったということだが、そこから発掘されたものは3cm程もある未消化の動物の骨や、寄生虫の卵、植物の種子、トイレトペーパー代わりに用いた藁木等、当時の人々の生活状況が見て取れるものばかりでおもしろい。

●福岡城に天守閣は存在した！？

今、福岡城は天守閣を持たず、天守台と礎石を残すのみである。天守閣は幕府に対する深謀遠慮から建設されなかったため、天守閣に関する記述や絵図は存在しないという話を聞いていたが、最近その存在を記した文章が見つかったそうである。それも、黒田藩のライバルである熊本の細川藩の古文書からというのがおもしろい。どうやら福岡藩は城の防衛のため、天守閣のことは一切文章に書くことを禁じたため、記録に残っていないということらしい。黒田藩の情報規制の厳しさ、統治能力の高さを感じる。天守台は展望台となっており、福岡の町並みが一望できる。まちあそびの会はここまで二時間歩きっぱなしの強行軍だったので、天守台はいい休憩場所となった。

多聞櫓や母里太兵衛長屋門、名島門など現存する櫓や門を見てまわった後、福岡城の模型がある(株)しんわ本社ビルへと向かった。当日は土曜日であったため本来は閉館日であったのだが、是非模型を見せていただきたいということを伝えると、快くビルを開けて下さった。この模型は、縮尺約1/400、広さは9㎡であり、福岡城と、その城下町を精巧に復元している。今とは異なる海岸線の位置や、当時の町割りを見て取ることができ、「昔はこの近くまで海岸線がきとったんか」「ここまで堀が広がっていたのか」など参加者一同はこの模型に釘付けであった。模型の他にも福岡城資料館があり、資料のコピーサービスまであった。

疲れに加えて、しんわ本社ビルから玄洋社記念館まではオフィスビルが建ち並ぶため、まちあそびの雰囲気が出切れそうになったが、その途中にも黒田家濱町別邸跡などいくつかの見所があった。

●玄洋社記念館で、アジアや日本の革命運動家達の足跡を偲ぶ

玄洋社記念館は、狭い通りに面したビルの2階にあり、入口も暗く、なかなか入りづらい雰囲気がある。私もつい最近、所員に教えてもらって知ったのだが、参加者の中にも「知らなかった」と言う人や、「知ってはいたが女性は入りづらかった。今日はみなさんと一緒なのでやっと入れる」という人もいた。資料館には福岡だけでなく東アジア一帯に影響を持った玄洋社に関する展示がある。孫文も玄洋社を訪れたそうで、福岡の近代史をよく知らない私にとっては、ここを知る



福岡城天守台付近からみた福岡のまち並み



しんわ本社ビルにある模型:上が天神方面、下が西新方面



居酒屋長屋門大将の母里忠一さん

ことができたことは今回の大きな収穫の一つだ。

居酒屋長屋門の大将は、黒田二十四騎の一人、母里太兵衛のご子孫です

居酒屋長屋門の大将、母里忠一氏は、「酒は～飲め飲め～」で知られる黒田節のモデルとなった母里太兵衛の二十四代目の子孫にあたる。母里忠一氏は黒田藩や福岡の歴史にとっても詳しく、福岡藩伝の剣術師範でもある。今でも週に2回は剣術の稽古をされており、毎年1月3日には鎧甲を身につけ、真剣を持って立ち会うということで、まさに現代に生きる侍のような方だ。「今は商人の姿形をしておりますが、武士の心を持っております」と、ときおり鋭さも見せながら、黒田藩の

築城技術や武具甲冑の話、黒田二十四騎の御子孫のお話などをして下さった。

黒田家と二十四騎、合わせて二十五騎の子孫の方々は、定期的に集合していたのだが、それも途絶えて久しいらしい。参加者の中には、黒田二十四騎である毛屋武蔵武久の末裔の方もおられ、「いつかまた二十五騎の子孫が集合できれば」とおっしゃっていた。

●知れば知るほど、今までとは違ったまちに見えるお酒を飲みながらの意見交換では、「歴史を見て歩いたのは初めてで、とても新鮮だった」というお話や、「今まで通り過ぎるだけの場所だったが、これからは子供に話を聞かせながら歩くことができる」というように、“まちなかに点在する

おもしろい話や歴史ある場所を知った、あるいは再発見した」といった声が多く聞かれた。私も、福岡を訪れた友人が歴史文化を見たいと言ったとき、今までは太宰府天満宮に行っていたが、今回いろいろと歩き回ったおかげで紹介できるところが増えた。

この会を続けていくことで、福岡・博多のまちなかに点在するおもしろい場所や話のストックをためていき、それらを地図に落としした「おもしろマップ」を作りたいと思っている。

二回、三回と「福岡・博多まちあそびの会」を続けていきたいと考えていますので、どこかご推薦の場所等ございましたらご連絡下さい。

(はら けいすけ)

まち歩き

自分が住んでいる町の宝を探す

—熊本県小川町—

雪丸 久徳

歴史や地理を訪ねて鹿児島のみちを歩く「かごしま探検の会」という団体がある。毎月、会のメンバー30人くらいで、土地の歴史、隠れたエピソードをつまみに、まちを歩きまわっている。その会が熊本県の小川町でまち歩きをするというのでちょっと行ってみることにした。

といっても、小川町のことは名前すら知らなかったため、前もって町の情報を集めて、それをもって電車に乗った。特急で博多から熊本まで下り、そこから普通電車に乗り換えて20分くらいで小川駅に着く。そこからタクシーに乗り込んでまち歩きが行われる小川町の旧商店街に向かった。着いたときにはすでに始まっていて、30名くらいの人ばかりができていた。ある程度予想はしていたが、年配の方が多かった。

今回のまち歩きの会は、地元主婦グループ「風の会」と「かごしま探検の会」の協力によるもので、呼びかけは風の会が中心となって行ったそう。このグループは普段は、旧商店街にあるまちの駅「風の館・塩屋」のスタッフとして、コンサートやシンポジウムを開いたりして町を盛り上げようと頑張っていると聞いた。

まち歩きでは、神社や寺、建物などの10箇所くらいをゆっくり歩いてまわった。私は大学では建築を学んだせいか、道ばたで目にする古い建物にもとても興味が沸き、よそ見ばかりしていた。地名の由来や海岸線の変遷、エピソード、言い伝えなどのおもしろい話もきけたが、正直あまり頭に入っていない。このとき、白壁に描かれた^{こてえ}鏝絵を初めて見た。絵にどういう意味あるのか、どうやって描くのかなど、鏝絵の解説がもっとあればなあと思った。

小川町へ向かう電車の中で町の歴史を読んだ。小川町は交通体系の変化が起こるまでは、陸・海の交通の要街にあたり、山手の産物と海産物の集積地として、地域の経済の中心として繁栄していたらしい。薩摩街道が通り、大名行列の宿場としての歴史もあるようだ。実際にまちを歩いていると、大きな商屋や蔵、宿等が所々にみられる。残念ながら状態があまり良くなく、倒壊寸前のももあるが、当時の繁栄ぶりは想像できる。まちの繁栄の歴史の話を聞きながら、今にも倒れそうな古い建物や町並みに、この町の歴史が刻まれていると思うと、どうにかして残せないかという思いになった。

地元のおばさんは、「ずっと小川に住んでいるが、知らないことばかりだった。まち歩きに参加したことで自分が住んでいる町にも宝物がいっぱいあることがわかった。」と言っていた。

私もそうだが自分の住んでいる町の魅力にはなかなか気づかないものだと思う。このまち歩きに

参加してみて、自分の住んでいる地域のことを知るには、町に目をむけるきっかけが必要で、しかも楽しみながら学ぶといった感覚が大事だなと感じた。

ところで、まちの駅「風の館・塩屋」は、明治39(1906)年に建てられた白壁土蔵、木造二階建て建築である。長い間空き家が傷みがひどかったが、その魅力にとりつかれた風の会のメンバーが自己資金を投入し、また内装や照明などの不足分は地元の方に協力を得てよみがえらせたそうだ。メンバーの方は、他の建物もどうにか残していきたいと考えている。

私もこれを機に、この町の歴史や古い建物が未来に残るような仕組みを考えてみたいと思った。

(ゆきまる ひさのり)

所員近況

■平凡常識教語録① 観光案内標識消滅の法則

「観光案内標識消滅の法則」というものを発見した。観光地に出かけると、目的地の近くまでは親切な案内標識があり、この分ならばすぐに辿り着けると思ったとたんに、道に迷ってしまった経験をお持ちの方がおられると思う。これは、「観光案内標識消滅の法則」にはまった所為である。この法則の成立要因は、「こんな近くまで来たのだから、いくらポンクラでも分かるだろう」という感覚が前提になっているからである。近所まで来て、右に曲がると目的地に着けるのに、まっすぐクルマで通り過ぎていたりすると、「なぜそこで曲がらなかったのか、曲がって二軒目なんですよ」と言われる。もちろん「こんな近くまで来たら分かるだろう」と判断しているので標識は出ていない。

一方の、来訪者の側は「地図を見たりして訪れるのだから、おおよその近くまでは分かる。近くにきたら地図は頼りにならないから、矢印などのガイドが欲しい」と思っている。よく間近を通りながら二度三度と通り過ぎていて、「すぐ側まで来ながら何で分からんのか」と叱られたりもする。

国道の標識は親切で、「〇〇へ〇〇キロ」などと書かれているが、〇〇キロくらい移動したところで二カ所ぐらい、1キロぐらいに近づいたとき、



やっとの思いでたどりついた白水ダム



「農耕への熱い思いが実らせた」という白水ダムの案内看板500メートル、100メートルのところなどと、エベレスト登山の極地法のようにガイド標識をつけておいて欲しい。

先日も、大分県荻町の「白水ダム」と「円形分水」を見に行き、この法則に引っかかった。「白水ダム」の場合はあと1キロぐらいのところまでスムーズにたどり着いたが、最後のところが最近の工事によって不通になっていて、迂回路の地図があり、それに従ってクルマで動いたのだが、なにぶん距離とか目印が書いてない。案内人的立場にいた私はずいぶん面目を失った。

駐車場から600メートルの坂道を歩いてたどり着いてみると、クルマですぐ近くまで来ている人が沢山いる。ついつい力が抜けかかったが、それを救ってくれたのが「白水ダム」だった。

総勢七人、その美しさに感動、案内の説明を読んで感動、というわけで感動のお裾分けをしたいので、案内の写真を載せることにする。昭和九年から四年半をかけて造られた、「農耕への熱い思いが実らせた」重要文化財の説明をご覧ください。

(糸乗 貞喜)

■30年ぶりの山笠

昨春、私は子どもが小学校に上がるのを機に、生まれ育った筑豊の直方市に引っ越した。住居は、実家の近くにあった手頃な中古マンションに住む



剣神社山笠の「がぶり」(前が持ち上がっている)

ことにした。それ以前に、人口約6万人の地方都市に分譲マンションが数棟あったことに驚いた。最近も、駅前に新しく35戸くらいのマンションが1棟建て、今はまた次のマンション計画のチラシが入ってきている。そんなに住む人いるのかなと思っていたが、市外からの転入や、私のようなUターンで入る世帯はそう多くはなく、ほとんどは市内の移動や世帯分離のようだ。特にうちのマンションはバブル期に建ったものだが、近所付き合いが得意でなく地域を離れたい人が入ってきたという噂も聞いた。

地元に住むことは、たまに遊びに来ていた頃よりもいろんな行事を思い出させる。前住地も県内で、車で1時間程度の所ではあったが、それでも住むと来るでは違う。そんな中、秋に剣神社という地元の神社のお祭りがあった。今年は5年に1回の御神幸の年で、各地域で山笠を出して市内を練り歩く。お下り、お上りと2日間あり、各地域の末社をまわる。山笠を出す地域(基本的には町内会)が、全体で10いくつがあるのだが、今年は7つの山が立った。予算や人の関係で、毎回出せないところや合同で出すところも結構あるようだ。1度出ないと10年空くことになるので、引き継ぎも大変だ。

神幸は単に行列で歩くだけでなく、地元の人から「花代」を頂いては「打ち込み」といって掛け声と太鼓を鳴らし、そのあと「がぶり」といって山笠を前後に大きく片輪ずつ持ち上げて落とす。あまり激しいので山笠は途中で壊れ始め、修理しながら行進することになる。飾り付けてある人形は、博多山笠の使い回しとも聞いたが、そこは確認していない。

我が家も出たい、特に小学校1年生の子どもに

は参加させたいと思っていたのだが、うちのマンションは地元の町内会に入っていないのだそうだ。管理組合の理事長に聞くと、マンション住民としても「祭のときだけお願いします」とは言いにくいようで、参加は断念となった。

祭の初日、我々は見物客として山笠を見たのだが、私の父は実家の町内会の山を引いていた。子どもがそれを見て、やっぱり出たいといい、2日目はとりあえず子どもだけ、実家の方の町内会に参加させてもらうことにした。2日目の朝になって、父が「今日はきついからお前代わりに行ってくれ」と言いだし、急遽私も法被を着て参加することになった。私自身、小学1年の時以来、実に30年ぶりの参加だった。私が小学6年の時は町内会で山が立たず、高校の時は忙しく、それ以降は地元を離れ、ずっと出ていなかった。

30年前は子どもも多く、子どもたちは山笠につながっていないロープを持たされ、ほとんど電車ごっこ状態で山笠についていった。今は少人数なので大人と一緒に山を引いている。私の同級生も少ない。全部の地区を見回しても、数人という程度だ。ほぼ地区が重なる中学校では同級生は200人くらいいたのだが。

人がいないので今年が最後、という町内会もあり、だんだん縮小して行かざるを得ないのが実情だ。これはどこの祭も似たようなものだろう。ただ、住んでいても祭に参加していない住民も結構いるようなので、まだ潜在的な力はあるのかなと思う。(伊藤 聡)

古代食づくりは根気が必要

今回その模様を報告しているが「水城を歩いて古代食を食べよう会」で古代食弁当を食べる機会があった。私は、現在古代食をどういうふうにするのかとても興味があり、開催の2日前に“煮塩鮎”と“蘇”をつくる模様を「おたふく」太田さんに取材させてもらった。

煮塩鮎は、2リットルの水に昆布をつけていたものに塩を80g入れて沸騰させ、鮎を入れて弱火で20~25分ことごと煮る。これを冷まして味を染み込ませたものを3日3晩陰干ししたそうだ(当日はお弁当のものは既にできていて、外に干すまでの行程をみさせてもらった)。

蘇は、温度を保たないと焦げ付いてしまうので家庭ではホットプレートが都合が良いそうだ。今

回は業務用のオープンで作られた。100度以下に温められたオープンへ沸騰する前まで温めた牛乳をバットに注ぎ、あとはひたすら固まっていくのを待つのみ…。といってもここからは根気との勝負。20分おきに薄い膜ができるのでそれらを混ぜる。2時間経ったら大方が固まり始め、最後30分は10分から5分と間隔を短くして混ぜ固めていく。当時は土器だからできたが、鉄の鍋では焦げ付くそう。また、出来上がるまでの時間は今よりもずっとかかっていただろうとのことだった。文献には1/10と書いてあるが「そこまで煮詰めなくても固まりますよ」といわれた。

太田さん曰く「他の仕事をしながらできるけど、これだけやろうっちゃ大変です。手間はかかんし技術はいらんけど根気が必要です」とのこと。私は、取材中1時間ほど近くの宝満神社の紅葉を眺めてきた…。

そうしてやっと出来上がったほかほかの蘇は、ちょっと味が足りないチーズのような風味だった。しかし、2日おいた蘇は甘みが増していたようで美味しかった。そのできたての味の感想を事前に伝えていた所員からも「どんな味だろうと思っていただけ、美味しい」と好評だった。

保存食とはいえ、食べられるまでに自然の力を利用し時間がかかるこれらの工程。今回の取材は出来上がりの速さを求めてレンジや粉末調味料に頼っている自分自身の食に関わる時間を見直す良い機会となった。(愛甲 美帆)

■重層的ネットワークの連携に向けて

昨年は、中国のいろいろな人たちと出会った。限られた地域の人たちではあったが、中国という国が、これまで以上に身近な地域になったと思う。

これまでは、国内の経済活性化のために、生産機能を移転する先として中国をみていた。これが無くなったということではないが、中国を市場として、マーケットとして視野に入れた進出も増え、人の動きとしても、中国で生活する、働くという日本人も増えていくと思われる。

日本政策投資銀行と九州大学の提携による「アジアカンファレンス」のセミナーでは、台湾(新竹)、上海、そして九州の地域・ビジネス連携について議論が行われ、それぞれの文化、個性、得意とする部分を相互に生かしながら連携していくべきであり、国と国という段階から、地域と地域、

都市と都市、さらに大学と大学の連携など、重層的なネットワークの構築がこれから重要になるという指摘がされた。その第一歩として、いろいろな人々の往来の機会を創出することが重要であるとも言われた。

今後はさらにもう一段階進めて、これらの重層的なネットワークを相互にネットワークすること、つまり縦につないだり、あるいは斜めにつないだりすることによって、一層強固なネットワークづくりをすることが必要になると思われる。

昨年設立を手伝ったNPO法人は、設立以前から、中国のいろいろな人たちと出会い、行き来をし、どういう活動をすべきかという議論をしながら立ち上げていった。そういう点では、双方のニーズを前提とした事業活動の実施を目標としてはいるが、緒に付いたばかりで、まだ十分に機能しているとは言えない。今年は、これまでの事務所のネットワークを生かし、このNPO活動との重層的なネットワークづくりをしたい。

(山辺真一)

■“死後の世界はない”と考える日本人

10月の末頃に、笠崎まちづくり放談会の例会で長性寺(臨済宗妙心寺派)の野口和尚の講話を聞く機会があった。神仏関係のことが大好きな私としては、こういうめったにない機会を見逃すわけにはいかない。以前、高野山の宿坊に一人で泊まったときにも、朝のお勤めの後に講話を聞いたことがあったが、人が多すぎる上に話も短かったので、一度ゆっくりお坊さんの話を聞いてみたいと思っていた。内容は、箱崎のまちがこれまでどのように変わってきたか、という話からお寺というものはどんなものか、という話まで多岐に渡っていたのだが、「住職1人のお寺が成り立つ檀家数は200~250軒が適正規模で100軒未満だと食べていけない」だとか、「女性の方がお金についてもめやすいようで最後まで喧嘩しているのは娘さんと長男の嫁さんだったりする」とか、「喧嘩したままで同じ人の法事を別々に行っているところがある」など、普段は聞けないような話まで聞かせていただいた。

中でも印象に残った話は、“死後の世界はない”と考える日本人は8割ぐらいいるそうなのだが(参加者の場合も同じ割合だった)、それは特殊なことで欧米では3割~4割くらいしかいない

のだそうである。タイの人たちだと、ほとんどの人が「生まれ変わる」と答えるのだそうだ。

日本人のその考え方が「死んだらおしまいだから、今がすべて」、「自分さえよければ」、「死ぬまでバレなければいい」などと考える人が増えている原因なのではないか、とおっしゃっていた。私も“死後の世界はない”に手を挙げていた人間だったので、この話には非常に胸が詰まる思いだった。

(本田 正明)

変わった鍋を食べました

毎年この時期(年末)になると「今年のコト」を思い出します。今年は「美味しい物を知る」でした。

今年のインパクトNO.1は、福岡市博多区にある居酒屋「城」というお店です。店内は各々区切られるので個室のような感じになっています。この名物は店名と同じ「城」という鍋ですが、私が行った時は誘ってくれた友人におまかせで、先に2~3品他のものを頼み、食べ終わる頃に鍋を2人前(3人で行って)持ってきてもらうようにしていましたが、15~20分待ってやっと、コンロと空の鍋が用意され、それから数分後一升瓶(酒)を持った大将がやってきました。持ってきたお酒は一升瓶まるまる鍋に入れられ火をつけられます。すると一瞬で炎がぼわぁと上がります。アルコールが飛ぶまで鍋が燃える間、関西弁の大将との会話で盛り上がりました。神戸出身の大将が博多に店を出した理由は、知人から「(一人前になるのに)京都で20年、博多で2年」と言われたからだそうです。鍋の中身は、肉、魚、野菜といったシンプルですが、味付けがアルコールが飛んだお酒の米の風味と、最初に入れるバターのみというオリジナルになっています。この鍋は、すべて



このように一瞬で炎が上がります(分かりにくいですが湯気のように見えるのが炎です)

大将がお客さんの目の前で作るの、私達が行った日のように満席状態だと、20分程度待つこともあるようです。それでも、お客さんのほとんどは口コミの客だそうで、見て楽しい、味も美味しい、大将との会話もおもしろいとなれば、口コミで広がるのも納得できました。

(佐伯 明日香)

「玄米めし」試しています。

最近、我が家では試しと思って「玄米めし」を時々食べている。これがなかなか良い。どう良いかということ 自然と噛む回数が増えたこと(これは良く噛むことで食べる量を減らす効果があるそうだ)、胃腸の調子が良くなったような気がする(下痢する回数が減ったみたい)。「玄米めし」を早く炊くため、圧力鍋を購入したいと思っていた矢先、近くのスーパーで限定50名様、2000円というセールがあった。当日、オープン時間10分前に行くと既に50名くらい並んでおり、いざオープンとなって他の用事を済ませているとなんと5分くらいで圧力鍋売り切れのアナウンス。圧力鍋人気をあなどっていたことに反省。

今は、米炊き用の土鍋を物色中である。

(山田 龍雄)

編集後記

本号は地域資源がテーマになった記事が多かった。歴史にはまると伝えたいことが増え、文章が増えてしまうようだ。記事の中にはだいぶ内容をカットしたものもある。それぞれが思いを持って書いているので、文章を削る方も身を削る思いである。(ほ)

よかネット No. 73 2005. 1

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

http://www.yokanet.com

mail: info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

(株)地域計画・名古屋